

貨幣取引と信用

菅 知 彦

(一)

信用制度は他面「貨幣取引業の発展に結ばれ、……(中略)利子生み資本の管理が、貨幣取引業者の特殊の機能として発展する」(註¹)といわれる。このことから私は、前に別稿で(註²)、信用概念をそして信用の本質を、貸付取引・貸付資本の運動を内実として説明するのみでは不充分であり、より歴史的・構成的に貨幣取引の側面からも考察しなければならないことを示した。ただし、銀行制度の発展がこのようなものであるが故に、発展過程の二系譜は近代銀行の機能の中に、はぐくまれ結晶しているはずであり、信用は貨幣取引に由来するものと貸付取引の要素とを内包すると思われるから。

勿論、この二者結合に至る長い歴史的発展の道程で、二者各々は相離れ相互に影響しあい、便宜的・不必然的には結びつきながらも、別個に自己生長していく。

貨幣取引も低次の自然發生的内容から複雑化され・整理され、

より高次の貨幣取引(銀行における貨幣取引)となると、貨幣取引それ自体、その意味においても内容においても、大いに変容していることは否定できない。けれども、発展とはそのものの単なる量的増大ではない、基礎的萌芽的存在が他にかからいつつ、自己を変化させ、複雑化させ、高次化することではなからうか。高次の貨幣取引の部分構成の中にも、低位のものも含まれ、おのの発展の差違を内包している。この発展の差違を本質的區別として、両替取引のように低次の貨幣取引のみを本来の貨幣取引として、変容の著しい銀行券取引・予金取引(とくに振替出納取引)を貨幣取引より峻別することは、発展の理法の無視であらう。

貸付取引の面でも、同様に、簡單なる貨幣貸付(古くは前期的高利貸付)から、いわゆる信用の貸付にいたるまで、変化し・発展し・飛躍しているであらう。(註³)われわれは、発展したものの中に、肯定と自己否定・差別と同一とを見なければならぬ。

本稿は前稿「信用の本質」の補論として、それ自体としての貨幣取引とその発展形態を信用論との関連において考察する。

(二)

貨幣取引 (Geldhandel) は本来、貨幣流通にともなう純粹に技術的諸操作である。商品流通は貨幣流通を生ぜしめ、両者は相対応し、逆の方向をとつてあらわれるが、貨幣流通は商品流通によつて規定されている。このさい、貨幣は商品の所有者の転換、社会的機能転換を媒介する。この商品流通とその反面としての貨幣流通との過程において、商取引当事者は一方で商品取引 (販売・購買) にともなう諸操作、例えば商品の手渡・受取・宣伝・広告・記録などを行わねばならないし、他方、貨幣流通にともなう試金、貨幣秤量・貨幣の支出と受取・記帳といった技術的操作をとりおこなう。

素朴な流通の段階においても、これら商品取引労働と貨幣取引とは、生産者や消費者自身が行う段階から、分業が進めば、兼業もしくは専業の商品取引業者 (商人) や貨幣取引業者 (貨幣商人) が自己の業務として営むようになる。商品取引労働も貨幣取引労働も、商品生産における価値形成過程には全く関係しない。従つて、生産自体にとつては全く無駄な労働・流通上の一空費にすぎない。こうして、商品取引・貨幣取引の労働は出来る限り、社会の生産者や商人全体のために、専門の業務として一部の代理業者によつて、集中的に行われるに至り、流通空費は社会的には縮小されるようになる。

両取引は独立の事業となることによつて、二重の意味での分業が生じる。すなわち、特殊業務として社会全体の貨幣機構のため

に行われるが故に、集中され大規模に営まれる。このばあい社会的分業が存在する。ところが、この独立事業の内部で相互に独立する諸部門への分裂によつて、ふたたび、分業が生じる (技術的分業——商業なら仕入係・販売係・会計など、貨幣取引業なら出納係・帳簿係・会計係・為替係など)。

資本制経済のもとでは、商品の拡大再生産を担当する基礎的生産的機能資本は産業資本である。その産業資本の運動から派生し、従属し、その流通過程の一部を自立的な運動として担当する機能資本——商業資本 (商品取扱資本) と、同じく資本機能そのものから分離した、貨幣流通上の技術的労働を独立機能として営む貨幣取引資本 (Geldhaltungskapital) とがこれら二取引を営むようになる。

ただここで、留意しなければならないことは (一) 商品取引も貨幣取引も原生的には、単純商品流通の前提さえあれば存在すること、従つてそれら取引を営む者はみな商品取引業者・貨幣取引業者とは限らぬこと (二) 両取引とも、二重におこなわれることである。

(二) に関して、商品および貨幣の現実的流通過程は $W \rightarrow G \rightarrow W$ としてあらわれるが、この過程の二段階、商品に再転形されるための貨幣への転形 ($W \rightarrow G$) と貨幣へ再転形されるための商品への転形 ($G \rightarrow W$) とは、個別的な商人や生産者にとつても、社会的にも、再生産が連続されているならば、(註) 同時的取引である。

したがつて、商品取引が生産者対販売者と販売者対消費者とに二重におこなわれるのに対応して、貨幣取引もたとえば貨幣支払・

貨幣収納と二重化される。

貨幣取引のより具体的内容を、その歴史的発展に即して、その萌芽的基礎的形態より考察しよう。

貨幣流通は原生的にはまづ、共同社会対共同社会の生産物交換において発展したのであるから、独立事業としての貨幣取引業は、対外交易において始めて見出せる。各国内に鑄貨が存在するなら、対外交易において、商人は相異なる鑄貨に、自分の所持する鑄貨を変えねばならない。このことから、両替業 (Wechselgeschäft) が成立し、この両替業が近代的貨幣取引業の「自然発生的な基礎」の一つである。両替業の発展は、社会領域の拡大にともない、国内鑄貨の分立によつて、国内においても異なる鑄貨の交換が行われるようになる。また、為替取引も国際的あるいは国内的に地金輸送をとまう限りでは (両替業者間の相殺によつて、貨幣移動を排除された分は、純粹に両替取引であるが)、のちに述べる地金取引と結びつく。しかし、隔地商人間の商取引の結果として、或は旅行者の支払の単なる指図だけを目的とする、一両替商から他の両替商への為替取引から発展する。

一面、両替取引とも結びつくのであるが、国際貿易のさいに、一国鑄貨が世界貨幣としての地金金属に換えられることから、地金取引 (Barrenhandel, Bullion trade) が発生する。「貴金属の一般的重量尺度が本源的な価値尺度として役立ったと同じように、世界市場の内部では、貨幣のもろもろの計算名が、それらに照応するもろもろの重量名にふたたび転形される。無形態の地金が流通手段の本源的な形態であつて、鑄貨形態そのものは、本源

的には金属片に含まれている重量の公認章標にすぎなかつたのであるが、それと同様に貴金属は、世界鑄貨としては形状と刻印とを再び脱ぎすてて、無差別な地金形態に復歸する。(註⁵)」のである。世界貨幣の機能は二重の運動である。「一方では、その流れは、その産源地から世界市場の全面に動いてゆき、そこでそれは、種々の国民的流通部面により種々の国民的流通水路に入りこみ、磨損した金^{II}および銀鑄貨を填補し、奢侈品の材料を提供し、また蓄藏貨幣に凝結するのである。(註⁶)」他方、相異なる国の間を往復して、為替相場の動揺を引きおこす。地金の品質に關しての試金・鑑定や秤量はもちろん、貨幣鑄造労働も地金取引業に委ねられる。

地金取扱業者が行う金の国際輸送は商品取扱の結果であり、さまたまの利子歩合を表現する為替相場によつて規定されているが、地金業者は結果だけを媒介するのである。

貨幣取引業のおこなう貨幣の技術的操作は貨幣じたいの各機能に立脚している。貨幣は一般的等価形態として商品の価値の尺度であるが、現実の交換もしくは流通の形態にしたがつて、流通手段・蓄藏手段・手払手段・世界貨幣としての機能を果たす。地金取引業の場合、国内貨幣を世界に転化することを自己の業務として引受け、地金業者の貨幣の技術的操作はこゝに二重の機能から生じる。

單純商品經濟のもとでも、あるいは資本制社会においても、各生産部門で継続的生産がおこなわれ、各種商人が従事する商品売買が継続的であるなら、生産者や商人たちの手もとで、貨幣が出

し納れされる事態も恒常的である。貨幣取引業者はこの場合、生産者や商人たちのために単純な金庫業者 (Kassierer) となる。

この事態は二つの契機から把握出来る。まず、第一に、貨幣の保管 (Aufbewahrung)。…価値の一般的表現手段である貨幣は、凡ゆるものの購買手段となることが出来る。つまり、「富」の象徴的結晶であり、「社会的担保物」であるが故に、流通形態から蓄蔵形態に転化され、その蓄蔵貨幣 (Schatzes) は金庫の中で眠ることになる。さらに、購買手段および支払手段の準備金は、絶えず流通界ら金庫に出たりはいたりする潜勢的流通貨幣 (potentielles Umlaufgeld) = 休息貨幣 (Ruhegeld) であるが、この蓄蔵貨幣・休息貨幣は個人の金庫から、より安全な貨幣取引業者のもとに集積・保管されるようになる。(註7)

この貨幣の休息は、資本制生産のもとでは、固定資本の減価銷却積立金、貸銀引当準備金、季節的あるいは不時の生産手段価格・商品価格の変動に対する準備金、事業拡張のための蓄積基金などの姿をとつて不断にあらわれている。保管取引 (寄託) は返還 (引出) を条件としているが、保管行為それじたいとしては、蓄蔵貨幣が休息貨幣におけるより本来的・基礎的であろう。

第二に、貨幣の授受 (出納)・簿記。特に休息貨幣と結びついているのだが、生産者や商人たちの間の商取引において、貨幣が購買手段として機能するばあい、商品の購買によつて貨幣は支出 (ausgeben) され、販売によつて貨幣に受取 (einnehmen) される。また、貨幣が支払手段として機能すれば、支払金の支払 (Zahlen) および受領 (Empfangen) の操作が必要になり、

支払決済 (Ausgleichung)——商業手形による決済とも関連が有ると思われるが、逆方向の二つの取引関係が相殺によつて差額のみ支払・受取られる) は予託口座間の振替決済、さらには金庫業者間の決済といった無現金化操作の基礎的技術操作である。これらとその簿記も、貨幣商人が生産者や商人の代理出納業者として専門に営業するようになる。

「貨幣取扱業者が媒介するのは貨幣流通の技術的操作であつて、これを貨幣取扱業者は集積し、短縮し、簡單化する。貨幣取扱業者は、蓄蔵貨幣「および休息貨幣……営」を形成するのではなく、この貨幣蓄蔵を——これが自由意志であるかぎりにおいて——経済的最小限に縮小するための技術的手段を提供する。けだし、購買「および支払手段のための準備金は全資本家のために管理される場合には、各資本によつて別々に管理される場合ほど大きいことを要しないからである。(中略) 貨幣が支払手段として機能するかぎりは差額の決済を容易にし、また、この決済の人為的機構によつて決済に必要な貨幣分量を減少させる。だがそれは、相互的支払の関連も範囲も規定しない。」(註8)

以上、われわれは、貨幣取引業の自然発生的基礎をみた。これは相互に関連し、影響しあつて発達する。また、いづれもみな貨幣流通および貨幣そのものの機能なり機構にしたがつて、流通の技術的操作も規定されている。この基礎的・低次の段階での貨幣取引を要約すれば、次のようになる。

(一) 両替取引 (鑄貨の転換) ↓ 為替取引

- (二) 地金取引 (地金輸送・試金秤量・鑄造)
- (三) 保管・出納取引 (保管・出納・決済・簿記)

(三)

以上述べた貨幣取引が具体的歴史の上で、どのような姿をとつてあらわれているか素描しながら、三貨幣取引の発展系列や相互的連関について論を進めよう。

コナントその他の人達の指摘によれば、バビロニア・アッシリヤの昔に、銀行業者が存在していたとのことである。(註9)しかし、これらは貸付業者としても貨幣取引業者としても、未熟のものであつたから、銀行と認めるのは早計であろう。古代東方国家においても古代ギリシヤにおいても、神殿や寺院が政治権力と結びついて、財宝や貨幣を保管したり利殖したりしたが、職業的貨幣取引業・貸付業とは言われまい。記録や文獻の上で、貨幣取引の内容が明かにされているのは、ギリシヤのトラペジタイ (Trapezitai) 以降のことである。彼等は市場に店を出して、トラペザ (机) の上で、分立した都市国家のさまざまな貨幣の両替に従事したほか、貨幣の保管・出納・帳簿振替などの貨幣取引や貿易貸付さらには商事活動も営んでいた。(註10)

ローマにおいても、両替商アルゲンタリイ (Argentarii) が活躍していた。彼等の主要業務は両替取引であつたが、ほかに貨幣の予託を受入れ、その出納さらに簡単な振替出納、貸付や商業を営んだことはトラペジタイの場合と類似している。(註11)

ローマが滅亡し、長く続いた封建制封鎖経済の中から、ふたた

び商品流通や貨幣流通が芽生え、商業の発達とともに中世の貨幣商人が出現する。貨幣領域の分立、度重なる改鑄、不正確な量目などが両替取引・地金取引を必要としたのである。中世イタリヤ諸都市は十字軍遠征のために貿易・商業の中心地となつたが、この地とくにベニスでカンプソール (Campso) という両替商が活躍した。彼等は「鑄造免許権 (minting concession) をもち、公的貨幣督察官 (coin inspector) となり多額の支払を決済する金融機関たる機能をつくし、古い鑄貨を新しい鑄貨に、外国貨幣を本国貨幣に両替する」(註12)彼等は定期的に開かれる市 (Messe) において、商人達の債権債務の支払決済あるいは手形交換を媒介するようになる。この頃より彼等は、他の商人より貨幣の予託を受けるようになり、法的にはバンクাস (bancus) またはバンキエリイ (banchieri) と呼ばれるようになった。バンクাসは当初の予託貨幣の単なる出納から、後に振替出納さらには高利貸付を営むようになった。(註13)

以上のことからだけでも、複雑・雑多なそして遅々とした歴史の進行の中に、一つの筋道を見出すことは難しくない。歴史は論理的に整理され法則化される。第一に、貨幣取引は貸付取引や商事活動と結びつき、兼ね営まれて発達している。けれども、貨幣取引と商事活動との結びつきは偶然的、便宜的なものであり、また貨幣取引と貸付取引との兼営も必然的・内的関連をもつたものではなかつた。予託貨幣が他用され貸付られはするが、近代的銀行におけるように「予つて貸付ける」というよりむしろ「貸付けるために与る」もしくは「貸付るために予託を擬制する」信用

の貸付」なる事態はみられない。このことは恒常的・継続的商業の一層の錯綜、窮極的には、再生産的基礎が資本の運動として確立する後世に待たねばならなかつた。ともあれ、トペジタイ・アルゲンタリイ・カンプソールは、兼業としての貸付業や商業も営む單純な貨幣取引業者であり、両替取引・地金取引を中心に保管・出納取引もおこなつていた。

第二に、貨幣取引についての内部で、前に要約した三系列の相互的位置づけの問題である。歴史の当初に姿をあらわす貨幣取引業は、前にもふれたが、両替取引ないしは地金取引をまづ営み、保管・出納取引はその後から続き平行して發展する。その理由は、交易發生史と両替・地金取引との結びつき、および、生産や商業の継続性と保管・出納取引との関連に求められようが、こゝでは詳しい歴史的説明はしないでおこう。この歴史的過程で、両替↓為替取引の技術上の進歩が保管・出納技術上に影響を与えることはありえようが、逆に、商事活動の繁盛の結果としての出納(振替)技術の進歩こそ大で、これから為替取引に技術的革新(後に振替為替取引へ)を与えよう。特にカンプソールの振替取引(Giroverkehr)は当初は支払人と被支払人との立合上のものから、後に振替指図証による帳簿振替に變つていったのであつて(註14)、これは当時盛んになつてきた商業手形の流通とともに、貨幣無体化への技術的進歩であつた。(註15)こうして、貨幣取引は二つの系統(一)両替・地金取引(二)保管・出納取引に分化する。そして、その各々の發展は保管・出納取引に傾斜しつつ、銀行取引に接近すればするほど、相互の差別性を増していく。

カンプソールが冒險的貸付によつて破産・没落を続けるうちに、当時の商業は為替取引や出納取引を必要としていた。この基盤にたつて、ベニスを中心に十五世紀頃から、バンコ・デイ・サン・ギオルギオ(Banco di St Giorgio)バンコ・デイ・リヤルト(Banco di Rialto)その他の公立振替貨幣機関(普通に、銀行と呼ばれてはいるが、本来の銀行ではない)が設立された。(註16)これらは、前の私立バンキエールの失敗に学び、原則として(法的に)保管している予金の他用・貸付は禁じられ、専ら振替取引・為替取引を担当した。

商業の繁栄がイタリアから北欧に移るにいたつて、一六〇九年、改鑄などによる貨幣の混乱を克服する目的で、アムステルダム銀行(The Bank of Amsterdam)が設立された。やはり、イタリアの公立銀行を範とした振替銀行(註17)であつて、「予金不可侵の原則」が再現され、建前としては貸付られないことになつていたし、主要業務は振替取引と為替取引であつた。ただ、その設立目的からして、振替取引も單なる保管・出納より、鑄貨流通に代る帳簿上の貨幣による振替・決済、すなわち貨幣手段の造出にこそ意義があつたことは特筆されよう。為替取引もこの影響をうけて、振替為替取引への發展の道すじを強くのこした。かくして、アムステルダム銀行は後にイングランド銀行によつてその地位を奪われるまで、ながく国際貿易の中心決済機関たり得たのである。一六一九年にはハンプブルク銀行(The Bank of Hamburg)一六三五年にロッテルダム銀行(The Bank of Rotterdam)と同種の貨幣取引機関が設立された。

(四)

貨幣取引の發展は、さらにイギリス近世の例をみなければ充分でないが、その前に一考を必要とするのはマルクスの次の敘述である。「貸付および借入の機能および信用の取扱が貨幣取扱業の他の諸機能と結合するようになれば、貨幣取扱業は——たとえ初期のもので——充分發展している。(傍点引用者)」(註18)まず借入(Borgens)とは銀行の立場からみた予金取引、つまりは貨幣の予託のことであろう。信用の取扱(Handel in Kredit)とは「銀行券はたゞ流通する信用標章を表示するにすぎないものであるために、銀業者の取扱うものは信用そのものである……(傍点引用者)」(註19)の表現などからもわかるように、「單なる債務」の化体した銀行券取引であろう。(いまこゝではマルクスがあまり取上げていない貸付のための予金貨幣の振替設定は捨象する)

飯田教授はこの敘述を、(貸付・借入+信用の取扱)+貨幣取引||完全な貨幣取扱業と、とらえられる。「貨幣運動の技術的諸操作を代行するための貨幣取扱業は、もともと、貨幣の借入・貸付などの諸機能、信用の取扱には関連しないのだが、これらが貨幣取扱ほんらいの技術的諸操作の代行業務と結合することによって、貨幣取扱業は、貨幣取扱業としては完全に發達した形態となる。」(註20)として、借入および信用の取扱を貨幣取引より峻別される。

しかし、原文には「貨幣取引業の他の諸機能と(mit seinen

sonstigen Funktionen)」とある。この「他の」が何に対しての「他」か、文面では明らかでないが、借入および信用取扱に対する「他」として、(貸付)+ (借入および信用の取扱)||高次の貨幣取引)+ (他の貨幣取引||両替・地金取引)||銀行取引と解されないでもない。教授が根拠として引用されている文章は、いずれも、「單純な」金銭出納業者とか、「本来的」「純粹な形態における」とかの条件がついて(註21)、教授の根拠は前述の解釈の根拠にもなるようである。所詮、文献解釈上は、これだけではいずれにも結論は出まい。(註22)われわれの方法で、論理を進めよう。

借入という單なる言語の表現じたいは別として、予金取引と貸付取引とは、發生の根拠が全く異なるものである。のちに述べるが、予金取引は貨幣取引業者の保管・出納取引に出發点をもっている。現時の予金取引が、自然發生的な貨幣取引とは相違があるにしても、予金取引は貨幣取引から發展・飛躍したものであることまで否定は出来ない。一方貸付取引は形態上は、高利子生み貨幣貸付からの繼承である。一般に行われているが、視点を現在にのみに置いて、銀行を中心にした逆方向の債權債務關係の形式的類似性から、能動・受動の貸付取引を考えることは、理論上無意味であろう。(註23)つぎに、信用の取扱という事態は、信用貨幣取引すなわち單なる貨幣債務を貨幣手段として取扱うことで、やはり保管・出納の貨幣取引に歴史的根拠を有し、それと貸付取引とが一体的に結びつくときあらわれるのである。

以上の見解よりして、マルクスの前掲文は貸付取引+貨幣取引

(高次のもの・低次のもの) Ⅱ 銀行取引 (完全に発達した貨幣取引を内包する) と要約したいところであるが、まだ、早合点にすぎらう。いま少しく、本来の貨幣取引からどのようにして、いわゆる信用の取扱 (銀行券や創設される帳簿予金取引) へ飛躍的發展をとげるか、その「飛躍」を問題にしなければならぬ。その研究によつて、貨幣取引の自己否定的実存を明かにし得よう。ただ、「信用業の他の面は、貨幣取引業の發展に結ばれ」ているのであるから、前掲文を広く解しても、「近代銀行取引 (とくに信用の取扱) の中に、完全に發展した貨幣取引が包摂されている」ことの指摘と受取り、いまからの論理の指針とすることは許されてよいだろう。

(五)

貨幣取引業が銀行に完成していく途上、銀行前史上に存在したさまざまな貨幣取引は貸付取引と結びつき、その機能的前提となる保管・出納取引と、貸付取引に直接は結びつかない両替・地金取引との間に、銀行機能上また銀行の実務・意識の上で、格段の差別が出てくる。まづ、保管・出納取引は貸付取引の前提となり、保管貨幣の一部が沈澱・遊離し、(註24) 他用し貸付られて貸付取引は貨幣取引の帰結となり、保管的貨幣取引は銀行取引のなかに本来的取引として包摂されていく。一方、他の両替・地金取引は、銀行にとつて副次的・附随的取引となり、またそのように意識される。

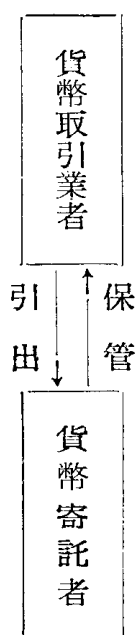
貸付取引との関連から、貨幣取引の内部で銀行取引に本来的に

結びつくものと然らざるものとの格差が生ずる。また、保管・出納取引は貸付取引に一体的に結びついているが故に、出納 (決済) 技術の発達とともに、出納取引は飛躍的に發展するのである。この故に、貨幣取引とは全く異質的なものと意識されるような発券取引 (信用そのものの取扱) 予金取引 (振替出納予金・投資的予金の取扱) が貨幣取引のなから姿をあらわすのである。

(1) 単純な保管取引。

原生的な保管・出納取引は、単純な貨幣保管 (寄託) であつた。貨幣取引業者は、貨幣保管の依頼を受ければ、保管証 (貨幣返還請求権を内実とする) を手渡して、この貨幣を自己の所持する貨幣や他の保管貨幣とも區別して、返還の要求があれば、依頼者の保管貨幣そのものを手渡していた。このばあいの保管貨幣ははじめは純粹の蓄藏貨幣であつたろうし、期限つきもしくは要求次第の保管・払出という単純な操作を行うだけで、保管依頼者から保管手数料を徴集していた。「このような予金を中世において depositum reglare と呼び、正規の予金とみなしていた」(註25) この単純な保管取引 (Aufbewahrungsverkehr) に、すべての出納取引 (Kassenführungsverkehr) の基礎を見出しうるのである。

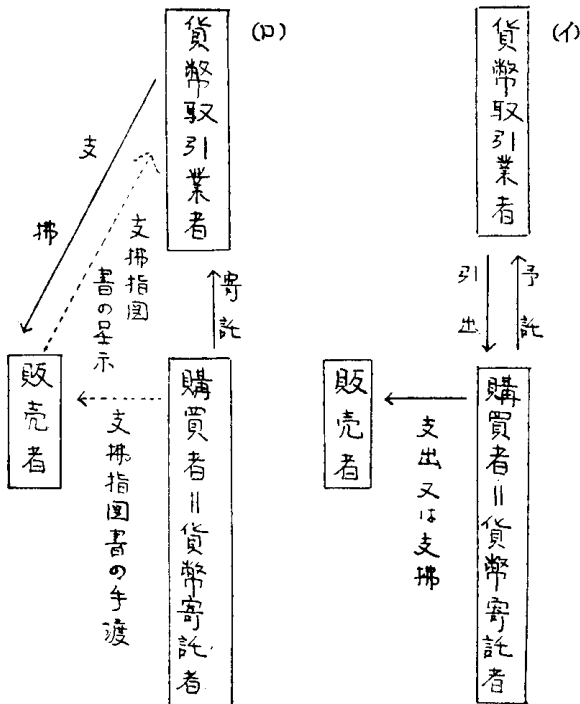
【図】(1)



(2) 現金出納取引。

さらに生産や商業が継続的・恒常的となり交錯してきて、商取引のための購買手段貨幣の常時一定の準備が、貨幣取引業者に保管を依頼されるようになれば、保管それじたいよりも出納の方に意味が増してくる。この場合、商取引当事者間の貨幣授受関係は、金庫業者対一方の当事者の取引（保管依頼・予託貨幣引出）と、当事者間の取引（貨幣支出・受取）との二つに分裂する。すなわち、単純な保管取引でなく、出し納れによつて貨幣予託額が増減する現金出納取引（Barkassenführungsverkehr）が出現する。保管依頼から払出までの期限が不定になつて全く要求払形態となり、「予託→引出→購買手段として支出」さらに「購買手段

〔図〕 (2)



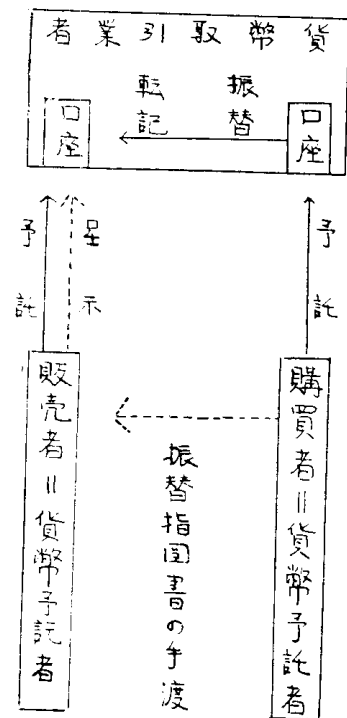
貨幣の受取→予託」が繰返される。依頼者にとつてこの取引の目的は、保管依頼より出納の代理の意味が強くなつてくるし、貨幣取引業者は保管貨幣残高と支払準備を考えながら、出納技術の上に貸付取引を結びつけるようになる。

支払準備金の出納においても、事態は変らない。たゞ支払手段貨幣の性質上、貨幣支払が予託者の手を通じて引出→支払と二重化されずに、貨幣取引業者から販売者への直接支払という形式をとる場合が考えられる。前図の(ロ)の例であるが、これも(イ)を基礎としてあらわれる。この場合、貨幣予託者の振出す貨幣支払指圖書（保管取引における貨幣保管証の発展したもの）の呈示によつて、貨幣取引業者は支払をなすようになるだろう。この貨幣支払指圖書は銀行券（Bank note）小切手（Scheck, check）の始源的形態と考えられるが、支払指圖書の流通だけでつぎに述べる振替出納取引は考えられない。商取引当事者間の貨幣授受関係は、こゝでは、出納業者対販売者の取引に改編されている。債権債務関係が逆方向へ重なりあつたばあいの支払決済方式は当事者間の手形相殺の差額支払の形式であろう。（註26）

(3) 振替出納取引

商業社会において、貨幣商人への貨幣保管の依頼や出納業者による現金出納取引が普遍化すれば、保管取引・現金出納取引を基礎として振替出納取引（Girokassenführungsverkehr）が行われるようになる。まず少くとも、同一の貨幣取引業者に貨幣予託をしている商人達の間の貨幣収支は、貨幣取引業者の帳簿口座の間の単なる数字の振替転記だけで済まされる。〔図〕(3)例のように

(圖) (3)



この場合、購買者の振出す振替指圖書（振替票（Giroanweisung））を販売者が貨幣取引業者に呈示することによつて、購買者の口座から購買者の口座へ帳簿貨幣の振替転記が行われる。（註27）この帳簿上の貨幣は振替出納予金と呼ばれ、振替指圖書である小切手によつて収支が行われ、また小切手は転々流通することも出来る。商取引当事者の貨幣授受関係は、帳簿上の振替転記に改編されて、現実の貨幣流通を排除する。

異なる貨幣取引業者と取引している商人達の間でも、貨幣の授受は貨幣取引業者間の手形・小切手の交換と各口座の帳簿残額の移転との後に現金で支払決済される。また、これら振替取引と為替取引とが結合して振替為替取引（送金のための両替取引）が發展するが、これは貸付取引の前提となる貨幣取引でなく、両替取引の發展形態と解すべきであろう。

(4) 銀行券取引（発券取引）

保管取引ないしは現金出納取引から、振替出納取引へ發展する

系列のほかに、もう一つの貨幣取引の發展形態は、同じく保管取引もしくは出納取引に由来する銀行券取引（Banknotenverkehr, Notenausgabenverkehr）である。前に保管取引の項で述べたように、貨幣取引業者は貨幣の寄託を受ければ、寄託者の要求あり次第保管貨幣を払い出すという債務を内実とした貨幣保管証書（寄託証券）を作成発行した。この証書は保管取引から出納取引への發展に応じて、寄託者でなくとも持参人に一覽払するという条件の債務化体書、すなわち、貨幣支払指圖書に變つて行く。はじめは手形と同様に、裏書によつて譲渡され、額面金額に端数があつたこの証書も、代用貨幣手段としての流通の便から、裏書を必要としなくなり、端数の無い一定単位に分割されるようになる。現在の兌換銀行券に極めて似てくる。金貨と同単位流通手段の性質を持つようになると、その流通性からして、本来債務証書にすぎず現実の貨幣に引換えられねばならないにもかゝらず、金貨幣の支払（兌換）を要求されることは稀になり、貨幣取引業者は安んじて保管鑄貨を貸付に廻すことが出来る。この場合、支払指圖書は実質的貨幣の保証が無く、直接的には価値より切離された存在形態をとっている。

このような紙券が銀行券に完成し、その取扱が発券取引に發展するまでに、一つの飛躍・革命・異質化が見られる、けだし、歴史は飛躍を内包した發展であらうから。それは保管取引・出納取引に由来し、附随してあらわれた紙券が、保管取引から自立し、寄託という事象を否定して、それじたい自己目的となるところにある。保管取引・出納取引を基礎として、貨幣取引業者は現実の

寄託にもとづかない保管貨幣支払指図証書を発行しても、予託証書と外見上同じであり、予託証書の流通が普及しているところでは両者等しく流通する。こうして、保管取引・出納取引に附随して生じた発券行為が、貨幣取引の目標に自立発展する。

銀行券の体化している債務は、寄託の擬制に立脚しているのであるから、貨幣の支払約束に止まり、「単に振出人の債務を表示し、したがってその所持者にとつて債権が考えられるような、片務的關係をその内実としている。」(註²⁸)したがって、貨幣取引じたい双務的な保管・出納取引に出発して、片務的信用Ⅱ「単なる信用」Ⅱ貨幣的信用を内包する銀行券の発行という片務的取引にまで登りつめ、その銀行券を貸付を通じて流通界に送りこむ(銀行による貨幣取引と貸付取引との結合・統一)とき、貨幣取引は複雑化され、完全なものになつていふと考へねばならない。歴史的具体的には、銀行券取引は近世イギリスに始まると通説上いわれている。十七世紀初頭、ロンドンの金匠は(Goldsmith)貨幣取引業者としての有力な地歩を占め、貨幣保管を依頼されれば、予託証として金匠手形(Goldsmith's notes)を発行した。この手形が要求次第持参人に貨幣を支払ふ約束のものになり、裏書によつて転々流通するようになつてくる。はじめ外国貿易において姿をあらわした為替手形が、国内的にも流通するようになると、その基礎の上に金匠手形は発展した。すなわち、商業手形をそれより流通性の高いゴールドスミス・ノートで割引く形式で、貸付取引と結びついて発券がなされた。一六九四年イングランド銀行(The Bank of England)が設立され、金匠の業務を吸収

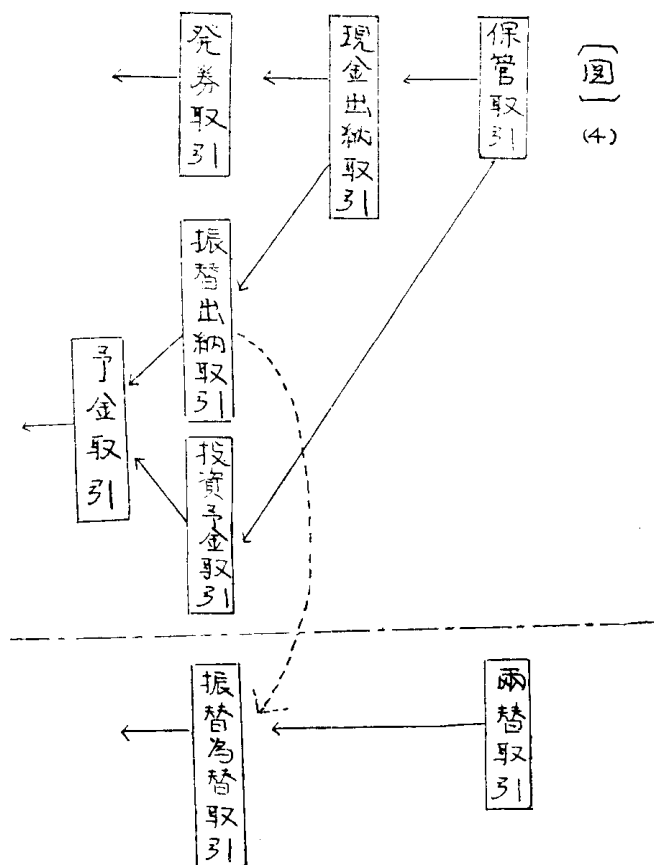
・引継ぎ、金匠手形を真似てランニング・キャッシュ・ノート(running cash note)を造らにはシールド・ビル(sealed bill)といった銀行手形(Bank bill)を発行した。これが額面が一定となり、印刷され、裏書なしに流通するようになつて兌換銀行券として発券取引が完成していつた。(註²⁹)

(5) 投資資金取引

このようにし、貨幣取引業者が銀行業者(Bankier)になつていくとき、保管・出納取引にもう一つの系統があることも見のがせない。いままで述べたように「商業世界の予備基金が、共同の基金として集積されるのであるから、必要な最少限度に制限され、さもなくば予備基金として仮眠するであろう貨幣資本の一部が貸出され、利子生み資本として機能する」(註³⁰)といふ事態が基礎となり、さらに予託貨幣に利子が支払われるようになれば、利子を目的として、貸付資本家の貨幣や「あらゆる階級の貨幣貯蓄および差当りは運用されていない貨幣が銀行に預けられる。各々それだけでは貨幣資本として働きえない小額が、大量のものに合一され、かようにして一の貨幣力を形成する。(傍点引用者)」(註³⁰)

この予金利子を目的とする予託貨幣は、ミーゼスのいわゆる投資資金(Anlagekapital)であるが、投資資金取引も保管取引を技術的根拠として、貨幣取引と貸付取引とが一体的に結びつけられる段階にあらわれる、高次の発展した貨幣取引にはかならない。思うに、寄託者から保管手数料を徴収した保管取引から、予託者に予託利子を支払ふ投資資金取引に変化するの、利子生み

(圖) (4)



資本運動の果実である利子の一部分讓が契機となるからである。

このように、保管・出納取引は異質化しながらも、発展した・完成された貨幣取引として、債券取引と予金取引（現金出納取引・振替出納取引・投資予金取引）の二系列に分化発展の道をすゝめていく。

(6) 資本制生産における貨幣取引の役割

マルクスは、資本制生産における信用の役割を次のように要約している。(註1) I、利潤率均等化の媒介。II、流通費の節減。

III、株式会社の形成。一口に信用の役割といつても、信用じたいさまざまな内容を有しているが、こゝで、I・IIIは主として貸付取引に関係しており、貨幣取引にかゝる信用の役割はII流通空

費の節減のなかにみられる。もちろん、貨幣取引と貸付取引とは銀行取引のなかに一体化していて、切離し難いものではあるが、単純な貨幣取引にしても、貸付と結びついた高次の貨幣取引にしても、社会の流通費負担を軽減するに有力な取引である。

まづ、貨幣取引による貨幣そのものの節約。いわゆる無現金化の操作によつて、流通費は社会的に節約される。「諸支払が同じ場所に集中されるにつれて、それらの決済に関する自然発生的で独自のなまろの設備や方法が発達する。(中略) AのBに対する、BのCに対する等々の諸債権はたゞつき合せさえすればある特定の額までは、正量および負量として互に相殺されうる。かくして債務の差額だけが清算されればよい。」(註2) 支払が一カ所に大々的に集中されれば、それだけ差額がしたがつて流通貨幣量が、相対的に減少する。この自然発生的設備や方法は、初期の貨幣取引業や貨幣取引によつて、また商業信用(手形流通によつて、手形に内在する貨幣流通促進の機能があらわれる)によつて代表されよう。この無現金操作も、近代的銀行における貨幣取引にあつては、支払準備貨幣大量の同一金庫への集中と、振替取引ならびに手形交換との二つの契機から、手形相殺などの単純な貨幣取引におけるより拡大する。

以上は純粹に貨幣取引に附随する流通費節約方法であるが、他に貨幣取引にも貸付取引にも結びついた方法がある。一連の債権債務関係の連鎖が、貨幣取引業への貨幣の予託、貨幣取引業の貸付によつて連関されれば、現実の売買取引の媒介におけるより短い時間で支払が完了し、このように、流通速度を促進することに

よつても流通費は減少する。さらに手形や信用貨幣のような紙券を貨幣のかわりに流通させる節減方法もある。この場合、発券取引や振替予金取引の結果生じた貸付取引によつて現金が排除されて、流通費が節減される。しかし、われわれの貨幣取引発展の認識をもつては、以上の事態をハーンのように理想的無現金経済から説明していく立場には立ちえないであろう。(註33)

(六) むすび

貨幣取引の発展は、より詳しくは、商業手形との関連も見究めなければならぬし、銀行券取引と予金取引との二系列への分化の進路は、イングランド銀行が独占的發券銀行に發展していく過程で市中の予金銀行が生長していつたイギリス銀行史の具体的研究を必要とする。たゞ、貨幣取引が近代的信用に内包されて、より完成したものとなつていくこと、これが本稿の直接の展開目標であつたので、前のいづれも果しえなかつた。銀行信用に内的に統一されている貨幣取引と貸付取引とは、窮極的には物質的基礎である資本制再生産構造によつて規定され、直接的には、産業資本の価値増殖を論理的に前提する近代的利子生み資本の運動によつて結びつけられているが、信用貨幣の創造という擬制的貸付資本の形成なる事態に特徴的にあらわれている。わたくしが前稿で、信用における貨幣取引の側面を強調したゆえんも実にここにあつた。その意味で、信用創造、特に予金の振替設定について貨幣取引の面からの考察もなされなければ、貨幣取引の認識は不十分であろう。わたくしの不敏・拙文のゆえに、すべて将来に待た

ねばなるまい。

(註)

- 1 Marx, Das Kapital. Volksausgabe besorgt vom M.-E.-L.-Institut. Bd. III. S. 439. 岩波文庫版、向坂訳、一〇〇—一七頁

- 2 拙稿「信用の本質」(鹿児島縣立大学「商経論叢」第五号所収)参照

- 3 高利貸付の否定Ⅱ信用の貸付Ⅱ擬制的貸付資本流通に、こゝで問題となる第一の飛躍がみられる(貨幣取引とも結びついてゐるが)。形式の上では、本來の手形割引のほかに、それに形式上擬制した手形貸付があらわれ、さらに、資本の大量が現実的生産資本に固定化するようになれば、証書貸付があらわれる。企業の自己金融のための債券を引受・賣買する特殊な前貸も一つの変質であるし、出資証券である株式の引受・賣買に、すなわち出資を貸付に擬制したところに、貸付の第二の飛躍が考えられる。より高次の複合した擬制資本流通の形式である。

- 4 a. a. O., Bd. II. S. 98—100. 青木文庫版、長谷部訳、五の一三五—八頁参照

- 5 Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgabe besorgt vom M.-E.-L.-Institut. S. 144. 青木文庫版、宮川訳、四五六頁

- 6 Kapital. Bd. I. S. 151. 長谷部訳、二八一頁

7 a. a. O., Bd. III. S. 350. Bd. I. S. 136—8. 長谷部訳九の四五三頁、一の二五九—二六二頁参照、この点、マルクスはわれわれの休息貨幣も蓄藏貨幣に含めるので、マルクスとは異なる見解である。

8 a. a. O., Bd. III. S. 353. 長谷部訳、四五六頁

9 Conant, The Principle of Banking, 1908. p. 168.

10 Obst, Das Bankgeschäft. Bd. II. 7 Aufl. 1923. S. 7—8.

高木暢哉「銀行通論」一三二—三三頁参照

11 Conant, *ibid*, p. 171. 高木前掲書一三三頁（高木教授のこの著書に負うところ大であるが、以下一々挙げない。）

12 Landmann, Banking, Commercial, in *Encycl opedia of the Social Science*, 1950, p. 424. 植岡重行「近代の銀行の成立に関する若干の覚書」（鹿縣大「商経論叢」第三号所収）より轉載

13 渡辺佐平「金融論」六七—八頁

14 Marco, A., Die Funktion der Bank, übersetzt von H. F., S. 5.

15 手形流通にも貨幣取引的側面があるが、商業信用の当事者は生産者や商人であつて、貨幣取引業者ではないから、こゝではふれない。

16 以下歴史的事項は既に掲げたコナント、オプスト、マルコや渡辺、高木の各著参照

17 高木教授は、アムステルダム銀行を欠如態の銀行として一種の銀行と考えられているが（前掲書、七三・七四・一四二頁）、

資本前期の銀行であり、しかも、祕かに國家や國策会社に大きな貸付をしていたといへ、流通機関としての特徴が強いように思われる。

18 Kapital. Bd. III. S. 352. 長谷部訳、九の四五五頁

19 a. a. O., Bd. III. S. 440. 向坂訳、一〇の一—九頁

20 飯田繁「利子つき資本の理論」一八六—七頁

21 飯田「前掲書」一八八頁

22 文献解釈上の問題は將來の課題としよう。あくまでも、現実と結びつけて理解することが大切であつて、百年前のマルクスの言にこだわることもなからう。

23 銀行の能動・受動業務という區別は、信用媒介説と関連して、授信・受信業務という區別も主張されてゐる。（丹後愛二郎「銀行論」一二—三頁、山崎寛次郎「銀行論」六頁、森川太郎「銀行職能論」第一章参照）しかし、ともに貨幣取引に関して明確でない。

24 高木暢哉「銀行信用論」第四章第八節参照 Phillips, Bank Credit, pp. 52—54 参照

25 高木「通論」一〇五頁（Obst, a. a. O., Bd. II. S. 10.）

26 山下宇一「銀行小切手制度成立の経緯について」（松山商大論集、五の三・四号）四〇頁参照

27 高木「銀行信用論」第五章第二・三節「振替取引の本質、振替預金および小切手制度」参照。なお出納取引という概念は、マルクスの貨幣取引の規定やミーゼス（Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel, S. 271 ff. 東米雄訳、三二

一頁)の出納預金(投資預金との区別において)の概念に関連して考えている。

- 28 竹村脩一「仮空資本について」(金融論選集Ⅲ所収)一一四頁

- 29 高木「通論」一四六—一五〇頁、渡辺「金融論」第三章第二節、三宅義夫「商業信用と銀行信用」(信用理論体系(一)上所収)一九〇—一九三頁等参照。文献としては次のものがあるが、いまのところ歴史そのものを問題としているのではないので深入りしなかった。Richards, The Early History of Banking in England. Mackenzie, The Bank of England Note.

- 30 Kapital. Bd. III. S. 440. 向坂訳、一〇〇—一〇八頁

- 31 a. a. O., Bd. III. S. 476—479. 向坂訳、一〇〇—一七九—一八一頁。参照

- 32 a. a. O., Bd. I. S. 143. 長谷部訳、一の二六九頁

- 33 Hahn, Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits, 3 Aufl. 大北文次郎訳、参照